

素晴らしい出会い

緒方純雄

ご出席の方々の中に懐しいお顔を拝見することができ、大変嬉しく存じます。明二九日は同志社創立一一八周年の記念日であります。

また、私達は新島先生の生誕一五〇周年を記念して参りましたが、この年も終ろうとしています。この記念礼拝に招かれましたことは、私にとり光栄であります。私が勤めている新島学園は新島先生の郷里、上州安中に先生のヴィジョンを高く掲げて創立されました。初代の理事長兼中学校長は湯浅八郎先生でありました。以来四十六年の歳月が過ぎました。女子短大も高崎に設立されて漸く十年となります。この新島学園から私は特に同志の親しみをこめてご挨拶を申し上げます。また、

この機会に、創立以来私達が頂いて参りましたお励まし、ご後援に心からお礼を申し上げます。

私は戦時中の一九四二年秋に同志社大学文学部神学科に編入学しました。新島先生を知ってそうした訳ではありません。また、同志社のことを熟知して志したわけでもありません。それは在学していた大学の最終学年になって早々の時でありました。あと一年で卒業する。軍隊に入り、やがて戦地に派遣されることになる。そうなれば、当時の男が誰しも覚悟していたように、死ぬことは必定だと私は考えました。丁度その頃、私はまごまごしながらも信仰に入りかけていました。死んで

も思い残すことのないような信仰を自分のものとすることに懸命になっていました。そして当時大学として唯一の神学科があった同志社大学を私は選びました。迷い、いろんな人に相談はしたものの最後は私の決断でありました。新島先生を知っていなかったと申しましたが、入学して二ヶ月も経ない時に、若王子山頂の先生の墓前で先生と五平さんの話を聞いて、私は新島先生にじかに出会ったような感動を覚えました。以来、先生について話すような場合には、私はいつもこの感動を語ることから始めています。また、私が洗礼を受けたのは、高崎の地から京都に上り、新島先生に直接教わったところの長坂鑒次郎先生からであります。不思議な縁であり、感無量であります。

それから五十年が過ぎ、同志社を卒業して働き始めて四十七年の歳月が過ぎました。この歳月も私にとつてはあつという間に過ぎたように思われます。私達の人生の歳月の過ぎるのは実に早いものであります。皆さんのうちには、これから先に四十年、あるいは五十年あると思う人もあるでしょう。こんな人には四十年あるいは五十年の歳月はとても長く、

巨大とも思える量の時間でありましょう。いつまでも続くかのように見える時間でもありましょう。そして時間には裕福で、気前よく四、五年あるいは十年などは散財して一向に構わないような時間かも分りません。あるいは、どうしようかと手古摺る程長く感じられる時間でもありましょう。

他方、奇妙なことに時間がとてもスローに過ぎることがあります。私達が生きるにいろいろの悩みがあり、苦しみがあり、労することと多くあります。重荷を負うて辛うじて歩むことも生涯にたびたびあります。これらの中では、時間はとてもスローです。長く感じられます。時間は遅々として進みません。あるいは、自分にとり生死、浮沈のことが、成るか成らないか、耐えて待たねばならぬ時間が間々あります。成らない方の確率が高くて、待つも徒勞と思いながら、忍耐して待つ時があります。皆さんにも身に覚えがあるでしょうが、時間はスローです。神経を擦り減らすようにスローに進みます。そのような中では、短い時間といっても、それは私たちには長く感じられます。そうではあるが、過ぎ去れば、歳月が過ぎるのはとても早いです。ものを思

い始めた頃から、同志社に入った日、そして一本の道を歩み始めてからの歳月を顧みても、五十年、六十年、七十年の歳月はいつの間にか過ぎてしまった。あつという間に過ぎてしまったとしたか私には思えないのです。

詩篇九十篇に「われらが年の尽きるはひと息の如し……その過ぎゆくこと速かにしてわれらは飛び去る」と記されています。その通りだと私は思います。飛び去るような私達の人生であります。喜び、悲しみ、苦悶、苦痛、絶望、希望がありました。これらは私達人間が一樣に分ち合って体験するものです。しかし、私達の人生は自分の人生です。それぞれに自分の人生があるのみです。従って体験もそれぞれ違ったものです。自分の体験でありますから、私達はそれをうちに納めて他人には容易に語ることはありません。妻や夫に、子供にさえ話せず、自分にしまっておくものが、私達の人生の多くの部分を占めています。もし、滅多にないことでしようが、聞いて貰える人がいたら、それは長い長い身の上話になってしまふような人生を私達はそれぞれに持っています。それは本当に万感こもるとこ

ろの人生です。しかし、この万感こもる、そして一回限りである人生も私達にお構いなく過ぎて行きます。私達は年老い、やがて終わり、消えるのであります。人生のいろいろの場面で、私達は意地を張り、身体を張って自分で自分を主張し、抵抗し、押さえられると怒り、反撥してきました。私も若気の至りで、そうしたことをして中学で退学処分となったこともあります。しかし有無を言わず、時間は過ぎ、私達の人生を終わらせます。これが私達の人生であります。はかないといえ、実ははかない人生であります。

飛び去り行くような、この人生の中で、不思議でならないことが一つあります。それは出会いです。もし出会いがなければ、私達の人生はどんなにみすばらしく、自己本位的にとどまり、了見が狭く、狭い世界の中に自分を閉じ込めて生きて行くに違いありません。出会いを通して私達は人生を知っていきます。心は出会いによって開かれ、人間の姿、その高さ低さに目を向けることができます。より美しいものに憧れ、高いものに憧れ、心に弾みをつけられて高く飛翔しようとするのも、出会いを通してであります。出会いによ

つて成長し、広げられ、自分を形成します。このような励まし、きつかけとなるのが出会いであります。

さて、今まで「人生」とか「私の人生」と言葉は無造作に使ってきました。「人生」について抽象的にいろいろと語ることができました。しかし現にある「人生」とは、具体的な「私の人生」、皆さんひとりびとりの「人生」であります。私の人生と他人の人生とは違っています。他の誰のものでもない。この私の人生であります。他人のものと取り替えることのできない人生、これが私の人生であります。私が生命をもち、私が自分の精神と知恵を働かせ、私が判断し、私が意志を起こし、あるいは忍耐しながら、待ち望みながら、時を選んで自分の意志を現実化し、行動に移していくところの人生、これが「私の人生」であります。つまりこの「私」が基となっている人生が、「私の人生」であります。問題は、この基となっている「私」が分かっていることではありません。これは容易ならぬ問題です。一回限りの自分の人生が意味をもつか、もたないかは、この基となっている「私」が分かっているか、いまいかに懸かっています。問

題はこの「私」が正体不明であることです。だから「われ誰なるかを知らず」とのゼッケンを前後につけて、右往左往しているのが、私達の多数の人生ではないでしょうか。生きる肝心の自分なる主体が分らないことです。だから、私が生きているという実感が伴っていない。私が生きているという実感を伴わない人生があつて、しかもこれを「私の人生」と称しています。

今から二、三十年ほど前に起こった十六歳の女子高生の自殺は痛ましく、今も忘れることができません。それは東京近郊の高校で起こりました。一時限の英語のテストがあつて、彼女は「私は自殺するの」と友人に口走りながら廊下を通り抜けた。誰も本気にしなかつた。しかし実際に彼女は四階の窓から身を投げ、一時間後に病院で死にました。彼女は遺書を残していました。遺書といつてもテストの間に英語のノートに書きつづつたものです。それは次の文言でありました。

人間は強いように見えて 弱いもの
象のように大きく それでも蟻のように小さいもの

機械より強いけれど 野に咲く菊より弱い

もの

人間って哀れなもの 他の人に頼らずに生きて行けないなんて

と書かれており、そして末尾に「私は身も心もボロボロで考えがまとまりません」と記されていました。彼女は友人間では明るい子、家ではよい娘、そして将来保母になるのが彼女の希望でありました。将来へは一本の軌道が敷かれていたが、内面では自分が分からなくなり、そのため生きることが深まる矛盾となり、深まる絶望となり、彼女をボロボロにし、死に追いやったのであります。このように「私の人生」といいながら、この自分なるものが分かっている場合、私たちは生きているという実感を持たない。生きる肝心の主体がないからです。だから自分の人生に責任を取ることができません。自分がそこに不在であるから、責任を取る必要がない。責任を取ることで、おおよそ不可能なことです。これが日本で大規模に起こっている現象です。恥どころのことではありません。例外なところはどこにもない。いたるところにそれを大規模に現象として見るができます。こうした主体の不在ということこそ、新島先生が

いろいろの方面に惹かれながら断乎として教育に走り「同志社を創立された理由でしょう。だから、出会いといつても、本当の自分に、「私なるもの」に目を開かせてくれる出会い、自分の人生を持たせてくれる出会い、これこそ何といつても、すばらしい出会いだと私は思います。それによって一回限りの人生を私が生きるようにしてくれるからです。

先程読んでいただいた聖書の箇所（ヨハネ福音書三章十六―二一節）を読みますと、いつもあるひとりの牧師を思い出します。昭和二五年、全国教職者会議が奈良で開催されました。分団協議に移って、私より年輩の牧師がどうして牧師になったか、話してくれました。私は感動しました。彼は戦争が終わり、復員しました。再会を夢にまで見ていた妻子、母は家もろともになくなっていました。彼にとり世界は崩壊し、闇と化しました。彼は生ける屍となり、毎日闇の中をさまよいました。ある晩、破壊の跡をとどめる教会にさしかかった時、壁のすき間から牧師の声を聞きました。牧師は幾度も繰り返し、この聖書の箇所を読んでいました。「それ神はそのひとり子を賜わったほどにこの世を愛して下さった。」こ

の言葉に撃たれて、彼はその場に立ちすくんだと話しました。彼は愛しあうことこそ望みであった家族を失なった。そして彼は生きながら死んだのであります。生きること、死ぬこと―これは私達ひとりびとりの運命をきめる問いであります。それは私達ひとりびとりの問題です。しかし人間には、もう一つの死というものがあります。それは、愛する人の死によって私が死ぬという死であります。愛する人の死によって死を味わうのです。死人同様になります。体が空っぽになり、それこそ五臓六腑がどつと地に落ちた感覚となります。このような死は私達の人生の中で体験であります。

彼が愛する者をなくしたことは、もちろん彼の存在をあげての意志に反することであり、無念の極みであった。それによって彼は生ける屍となりました。しかし教会から洩れてくる「それ神はひとり子を賜わったほどにこの世を愛して下さった」という言葉を聞いたときに、家族の死、そして自分の死、痛み、絶望と、神がひとり子を与え、死に至らせたとしたことの間を思えば幾度も往復しました。神は自らの意志で私達のためにひとり子

を与えられ、死に至らせられた。愛する者を失ない、生きて死者となった自分の体験を通して、この愛は本物だと彼は知ったのであります。飄然として、彼は自分が神の愛の対象である。それにも拘らず、それを知らないで背を向けて勝手に生き、ひとりて生きていると考え、思うがままに生きていると過信していたが、今この神の方から差伸ばされている愛の対象が自分であると気付いて、自分のおぞましき、申し訳なき、さらには悔い改めを迫られたのであります。切つても切れぬ関係が神の側から与えられている。これほどまで神が私を愛してくださった。ここに彼は素晴らしい出会いをしたのであります。

このような自分を見出し、そして神が私達の存在の根底であることを彼は初めて知ったのであります。これは素晴らしい出会いでありました。しかし、この素晴らしい出会いは私達にもう一つの課題を投げかけています。すなわち、このような神の愛を知った者は、愛して行く主体へと転換していかざるを得ない。愛を知った者は、愛する人間とならざるを得ない。また愛と表裏一体をなしている神の義を知った者は、神の義を自ら証して行く

主体へと移って行かねばならない。このような神の愛と義、義と愛の前に、否その中に立たされている人間主体の形成こそが新島先生が今日私達に語りかけてやまないものだと思います。そのような形成が続いてこそ同志社の進展があります。この形成の進展を高崎の地から期待し、祈ります。

神様、キリストによってあなたが私達と出会ひ、私達に本当の姿を示し、またあなたの愛と義に応じて働いて行く者としてくださいましたことを感謝いたします。神様、どうぞ創立一一八周年を迎える母校同志社の上に、あなたが導きを与え、どうぞ深く真実にあなたに應えて行くことができるよう導いてください。責任をとる人々の上に、教職員、学生生徒の上に導きを与えてください。主のみ名によって感謝し、お祈りいたします。

アーメン

(大学神学部名誉教授・
新島学園女子短期大学長)

『同志社百年史』について

「通史編」(全二巻)

同志社百年の歴史を五つに時代区分し、次の五部から成っている。

第一部 創業と成育(明治前半期)

第二部 キリスト教教育の受難(明治後半期)

半期)

第三部 大学への道(大正期)

第四部 戦時下の学府(昭和前半期)

第五部 再生と発展(昭和後半期)

上野直蔵総長は「通史編」の「序」で、「同志社における徳育の基礎であるキリスト教は、それがキリスト教たるがゆえに、少なくとも一九四五年にいたるまで国粹的権威筋から胡乱な目でみられ、疑問視され、敵視されてきた。(中略)

同志社を護るための先人たちのすさまじいまでの攻防は、まさに一つのドラマであり、読むものをしして緊張と畏怖の念を起させるであろう。この書は同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分をも隠すことなく記している。」と述べておられる。ラットランドのグレイス教会における新島襄の、学校設立に関する訴えを起

点とする「通史編」は、確かに、キリス

ト教主義をめぐる同志社の攻防を軸に展開されているといえよう。もちろん同志社の諸制度や諸学校の変遷、そこで生きた学生生徒を含む諸先輩の動向などは、それぞれ独自に、読者に訴えるものをもつはずである。

「資料編」(全二巻)

「通史編」の叙述に用いられた基礎資料およびそれに関連のあるものを中心に編纂されている。同志社開業関係にはじまり一九七五年度までの主要な資料を収録、原資料による同志社百年史といつてよく、それ自体自立性をもっている。収録資料三五〇点、従来活字になっていたもの、すなわち未公開資料が数多く含まれており、読者は同志社史の新しい一面を見出すであろう。研究者の期待にも応えるものである。詳しい同志社年表を添えてある。

「通史編」一、六五八ページ。

掲載写真 三三五点。

頒価・六〇〇〇円。

「資料編」二、一九二ページ。

頒価・二〇〇〇円。

発行・学校法人同志社
取扱・同志社収益事業課
(☎〇七五—二五—一三〇三八)

わが家と同志社

新島先生が今出川の地に同志社を開校されて以来百二十年、校友会の会員名簿も二十五万人を超えたという現在、親子二代の同志社卒はあたり前、何の話題にもなりません。三代でも近頃は余り珍らしくはなくなりました。私は三代目ですが「息子は四代目の同志社マンです。」といいますが「へえー、本当ですか?」と、さすがに皆さんに驚かれます。四人が同志社を選んだ理由は四人四様で、学校には申し訳ないのですが、特に「新島精神を学びたくて」という崇高なものではなく、どちらかといえば偶然だったかも知れません。

初代の祖父・早野竹藏は同志社第六回の卒

西 晴 次

業と聞いています。祖父は始めから牧師になりたくて同志社を選んだのでなく、ただ単に「もう少し何か勉強したかったので、入学を申し込んだら許可されたから」と極く単純な動機のようにでした。私学の雄として難かしい入試を突破しないと入学できない現在と異なり、当時は小学校にも行かない人が多かった時代です。新島先生も学校を開いたものの学生を集めるのに苦労され、簡単な面接だけで入学させていたようです。祖父は卒業後しばらく香港や中国で牧師生活をしていましたが、後に実業界に転じ貿易の仕事をしていましたので、余り真面目な牧師ではなかったのかも知れません。

二代目になる父・西浩吉は昭和五年法学部を卒業しましたが、学生時代から記者の真似ごとをしていただけあって、卒業後は朝日新聞に入社し本物の新聞記者になりました。この父の入学動機は「同志社の入試には数学がなかったから」だそうで、書くことは全く苦にしない人ですが、数学は苦手のようでした。ところで、三代目になる私・西晴次は昭和二十八年法学部を卒業し、北九州の地方百貨店に就職しました。私の動機は九州の田舎にあきたらず「何となく母のふるさと京都に憧れて」でした。とにかく、京都で学生時代を過ごしたただけのことです。しかし、今にして思えば、母は私を自分の生れ育った京都へやりたくて、小さい頃から私を洗脳していたように思えます。また、当時は戦後のどさくさ時代、その上現在の飽食とは全く反対の食糧難の時代でした。よくも私を京都へ送り出してくれたものと、今でも両親には深く感謝しています。

四代目の私の長男・西浩一は、昭和五十七年の文学部卒で、現在陸上自衛隊に勤務しています。さすがに四代目ともなると「代々親が学んだ学校だから」と、四代目を意識して

入試に挑戦した次第です。私も口には出しませんでしたが、ここまで来た以上四代・五代と続いて欲しいと心で願っていました。以心伝心とでもいうのでしょうか、長男は地元九州の大学など眼中になく同志社を目指しました。

ただ、残念なことに、まだ可能性はあるものの長男には、今のところ男の子がいないので、百年かかって作られたこの記録も、四代目で終るかも知れません。なお、父の西浩吉はある事情で母方の姓を継ぎましたので西姓になりましたが、初代の早野竹蔵とは実の親子です。

ところで、こんな家系みたいなことはどうでも良いのですが、昨年の十一月に同志社校友会北九州支部の総会が、本部から松山総長をお迎えして、北九州市のホテルで開催されました。その席で徳永北九州支部長が総長に「西君の家は四代続いて同志社を卒業され、特に初代の方は新島先生の葬儀の際、先生の柩を担がれたそうです。」と紹介されたものから「それは珍らしい。それなら新島先生のことを、おじいさんから色々聞かれていますでしょう。どんなことでも良いので、ひとつ聞

かせて欲しい。」ということになりました。

しかし、私が生れた時すでに祖父は亡くなっていたので、当然祖父からは新島先生のことを何も聞いていません。ただ、父から祖父がこう言っていたと聞いたことはありますが、あくまでも父を通しての「又聞き」です。その上、殆んどことは、すでに色々な本に書き尽されており、残念ながら今さら書くようなことは全くありません。強いて書かせて頂くなら、新島先生を神の如く慕っている極く一部の人は、お叱りを受けるかも知れませんが、その点はご容赦をお願いしたいと思います。

新島先生は大変博学な方で、単に神学だけでなく、全ての学問にも広く知識をお持ちだったそうです。しかし、政治や経済などどちらかといえば専門外の講義では、何かのほずみで生徒から専門的な深い質問を受け、答えに窮した時、知らないとは絶対にいわず、得意の弁舌でうまくその場を切り抜けることもよくあったといえます。とにかく新島先生は非常な雄弁家で、お話が始まると誰しも何時の間にかその話に吸い込まれてしまう不思議な魅力があったそうです。また、性格的には

大変気が短かく、感情の起伏も激しく、生徒の些細な悪戯にも激高されることがよくあったと祖父は父に語っていたそうです。これは私見ですが、現在のおとなしい学生の集りと異り、ひと癖もふた癖もあった創立当時の学生相手では、止むを得ない面もあったのではないのでしょうか。

新島先生は確かに強い意志と行動力を持たれ、今日の同志社の基を作られた立派な方であることは誰もが認める所です。しかし、先生もやはり「人の子」神でも聖人君子でもありません。私は祖父が父に語っていたような人間的な面があっても、決しておかしくは無いと思います。

現在、わが家には同志社に関する資料的なものは何も残っておりません。以前は父浩吉が学生時代、当時新進気鋭の若手教授だった故住谷総長の指導で、旧制堺中学時代からの親友であり、昨年お亡くなりになられた児玉実用先生と同志社新聞を創刊した関係で、創刊時代の同志社新聞や文芸誌が沢山ありましたが、戦時中の疎開を含む度々の引越して、いつしか無くなり今は全くありません。

しかし、ただひとつ私が大切に持っている

ものがあります。それは新島先生関係の本なら必ず巻頭に載っているような、極くありふれた先生の写真です。祖父が誰かから貰ったもので、裏に英語でそのようなことが書いてあります。寺町の写真館で大量に作られたもので、資料的には何の価値もないものですが、祖父から父へ、父から私へと受継れたこの百年前の写真を、ただひとつの宝として私は大事に持っています。今は遠くに居る長男も、いづれ任地から帰って来ると思いますが、その時、平和を愛した新島精神を忘れない為にも、この写真を長男に譲りたいと思っています。

(昭和二十八年法学部法律学科卒)

校友会北九州支部副支部長

『創設期の同志社』

——卒業生たちの回想録——

初期の同志社を語るとき文献としてまずあげるのが、この『創設期の同志社』である。

収録されているのは、安部磯雄、深井英五、海老名弾正ら、英学校に学んだ四十名。湯浅初子ら女学校に学んだ十五名である。

勧める理由は、読みやすくて、しかも面白いからだ。構えて書いた堅苦しい歴史叙述ではなくて、ざっくばらんに在学時代の思い出を語った談話を要約筆記したものだからである。

彼らはいと楽しげに、寮、授業、娯楽、食事、宗教活動など、当時のいわゆるキャンパス・ライフを語る。関連して新島襄、デイヴィス、ラーネッド、山崎為徳らをはじめとする教員たちの思い出を語るものである。すべてが生き生きとしている。面白くて読みやすく、しかも従来あまり明らかなかった初期同志社の側面がえがかれていて、資料的価値も高い。

だれよりもまず、学生生徒諸君にぜひ読んでもらいたい本である。

A5判四五二頁

頒価一、五〇〇円

発行・同志社社史資料室

取扱い・同志社収益事業課

(〇七五)―二五―一三〇三七・八

二一世紀に向かってはばたけ

——国際人人材育成をリードする
誇れ私学 我が母校 同志社——

川村悦朗

私は、一九六五年に同志社大学法学部法律学科に入学し、一九六九年に卒業した。卒業して早や二四年になる。まさに光陰矢のごとくである。

同志社時代を振り返ってみると、随分良き先生に恵まれたものだと思ふ。確か二年生のとき、法学演習があり、現在、東京大学法学部教授である藤倉皓一郎先生が当時、専任講師で担当であった。先生は、同志社大学法学部を卒業され、ハーバード大学ロースクールに学ばれた新進気鋭でまだお年は三〇歳すぎであったと思う。

教材はハーバード・ロースクールの英書で民事関係の特に不法行為のコモン・ローので

あった。

先生の見事な解説に興味がそそられ、英語にも、特に読解力に力を入れなければと思ひ、強烈な英語に関する動機づけになったようだ。当時アメリカがヴェトナム戦争に関与し、若き四二、三歳のケネディ上院議員が米国大統領になり、アメリカに対して、憧れと米ソ二大大国の冷戦の国際情勢の最中、アメリカの共産主義に対する徹底したアジア戦略の中に日本も、日米安保条約のもと、日米が強い絆に結ばれ、当時の学生は敏感に、国内外の政治情勢に反応していた。また、日本が高度経済成長を続け高等教育すなわち大学進学の大衆化が始まった頃である。

当時の学園の雰囲気も、日本の政治状況を反映していた。しかし、世間では法学部が一番卒業するのが楽だとアホー学部とよく冗談まじりに言われていたが、法学部の大部分の学生は、他学部の学生と比べて地味で良く勉強していたようだ。というのは、人気のあるゼミに入るには、成績がものを言うことも一因であったかもしれない。ともあれ有意義な大学時代を過ごしたと思う。それから二四年経ち日本を取り巻く国際情勢は大きく変わり、米ソ二大大国の冷戦構造が終り、日本は経済大国になったのである。

そのことは、もはやアメリカの良き追従者ではすまなくなり、アジアのリーダーとして、政治、経済、文化の面で良き協力者として、政府レベルのみならず、民間レベル、すなわち市民レベルにおいても、国際人として、ビジネスだけでなく、国際協力の面においてもNGOs（非政府組織）が果たさなければならぬ諸問題が多いのではないか。そのための人材開発の面で高等教育の果たすべき役割は大と言わなければならない。

特に、同志社は明治八年、新島襄によって創立された、キリスト教精神にもとづく国際

主義を標榜する早稲田、慶応と並んで我が国屈指の私学である。そのことの使命、責任は大きいと言わなければならないだろう。

と言うのは、日本は明治時代になって、欧米に迫りつくために、国家主義の政策をとり、政府官僚の人材育成が急務であったため、東京大学をつくり、欧米の政治、法律、経済の良き追従者、すなわち、飲み込みが早く物事の処理が早く、記憶力が抜群の人材を養成してきたが、今日、明治時代の教育システムでは対応出来ない時代の転換期に來ていると私は思う。

このことを高等教育の面を述べてみたいと思う。

従来、特に、文科系大学卒業者は企業内教育によって、企業が求める人材育成に努め、将来の幹部社員を輩出してきたのである。

しかしながら一九九〇年代に入り、急速な国際化社会の中にあつて日本の占める位置が強い経済力の結果、高まってきたのである。

このことは、アジア諸国の中で日本が唯一先進七カ国の一員であり、国内の地域社会に貢献できる人材のみならず、世界各国の地域社会の中で貢献できる人材が求められる。

それは、日本人としてのアイデンティティを失わず、むしろ日本人の特性を生かしなお個の強い異文化間における交渉力に長けた人材が必要不可欠の時代に入ったのである。

今までは、一流大学を卒業後、中央、地方官庁、あるいは大企業、マスコミ、法曹界、学界を中心に活躍できる人材をそれぞれの組織の中で、育成してきたのである。しかしながら、異文化間における交渉力に長けた人材を育成してきたのであろうか。

私は残念ながら、非常にお寒い状況であると思う。

それは、日本の伝統的マネジメントが、意志決定においてボトムアップで安定性志向で内部思考（ウチ・閉鎖）オペレーション・戦術中心の思考、前例重視、根廻し会議、稟議制・責任体制の不明瞭、実施判断における裁量権が少なく、プロセスを重視で、組織・管理スタイルも集中、重階層、縦型組織体系、学歴主義、年功序列終身雇用、総務・人事を重視、官僚的（減点主義・ステータスの重視、全体・組織重視）と言えるあるいはその傾向が強い組織風土と言える。その中で果して、個の強い異文化間で通用する交渉力に長けた

人材が育ってきたと言えるのだろうか。このことは、同質組織社会の価値基準での優等生を初等教育から個性のあるのびのびした人材を育てるとタテマエでは言いながら、先生の言うことに従順な生徒を育て、大学においても、激しい討論や議論をしたり、発表する活気のある言葉文化を育ててきたのであろうか。また日本の大学は本当に国際化しているのか。教員は日本人ばかりで、優秀な外国人教員が欧米のみならずアジアから多くいるのか。口先では国際化、国際化と言う教員が多く、閉鎖的な日本のアカデミックな大学の体質を変革しなければ、これからは大学院時代だと言う大学人が多くても余り意味がないのではないかと思うのは私だけであらうか。

このことは、大学教員の多様化、すなわち、国際経験豊かな高齢者も含めてマスコミ人、ビジネスマンをもっともつと登用する時代に入っていると思う。

現在、約一〇％ぐらいはそのような人が大学教員になっていると言われているがせめて三〇％ぐらいまで当面すべきであらう。

このような日本の状況を打破するためにはまず、企業、大学、官庁間などでもつとお互

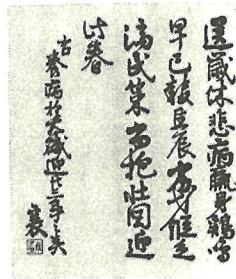
に人事交流を進め、出向制度をもつと充実させ、異業種間の人事システムを早急に確立すべき時期にきている。

そして、同質社会に風穴をあけ人事のフロ―化を積極的に進め、異質社会の価値基準の

優等生すなわち議論のできる個の強い人材を育てる転換期の時代に入っているのではないか。そのためには、同志社の大学歌にもあるように、もはや高等教育も、国立ではなく、誇れ私学の時代、即ち、政府主導ではなく民

間の活力が二一世紀の時代ではないか。

(昭和四四年、大学法学部法律学科卒業
大阪YMCA企画・広報室次長
大阪YMCA新聞編集長)



新島襄の色紙の影本を頒布

同志社の創立者新島襄の書簡・色紙などの遺墨に日常接する機会は少なく、せめて複製された色紙でも欲しいとのご要望に応じて、色紙の影本を、四点作成頒布しています。

この影本は、明治二年秋から二三年春にかけて、その心情を吐露された詩歌の遺墨の中から選んだもので、同志社関係者のみでなく、一般社会にも強く訴えるものがあると思います。

◎ 色 紙 (影本)

一葉 一、〇〇〇円 (送料一七五円)

(A) 「時危思偉人」

明治二年一月徳富蘇峰の依頼に応じて揮毫されたもの。

(B) 「不止月下併能越 豈涉八州是我分」

壯図却促男児涙 滴々跋為縷々文

明治二年二月八日新潟伝道に従事していた卒業生広津友信におくられた詩。

(C) 「送歳休悲病瀟身 鶏鳴早已報佳辰 劣才縦乏済民策 尚抱壯図迎此春」

明治二年一月一日大磯百足屋で春を迎えて詠まれた。

(D) 「真理似寒梅 敢侵風雪開」

◎ 購入ご希望の方は左記へ、直接電話または文書でお申し込み下さい。

◎ 代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから、後日ご送金ください。

同志社収益事業課
京都市上京区今出川通烏丸東入
電話(〇七五)一二五一―三〇三七・八

コンピュータを使用した外国語教育

同志社大学における外国語C A Iの歴史

同志社大学ではコンピュータを外国語教育に利用することは一九八五年に既に考えられ、最も進んでいた金沢工業大学のC A I (computer assisted instruction) を四人の外国語担当教員が視察した。ここでは、大学全体でC A Iに取り組み、豊富な予算、立派な施設と機器、専属の職員、教員とコンピュータに詳しい学生が協力して取り組んでおられた。ホストコンピュータと端末機の施設から、手軽に操作できるパソコンに切り替えつつあり、学習者が利用しやすいC A Iの環境が整いつつあった。

北尾 謙 治

同志社大学では、施設と機器、教員、予算とプログラム開発の協力者がようやくそろい、一九八八年後期から手探りで英語のC A I授業を田辺校地で開始した。しかし、日立のコンピュータとその端末機は決してC A Iを実施するには適しておらず、市販のソフトも全く使えず、すべて手作りの膨大な作業を伴う事業となった。

英語C A Iの教育目標としては、一、コンピュータに詳しくない教員でも指導できること、二、学習者と教員にフィードバックを早く与えて、それを利用して学習活動に役立てること、三、個別指導とプログラム学習を行うこと、四、学習者に主体的に学習させるこ

と、五、課外の個別学習を充実すること、六、大学の教養課程の英語の一年間コースを作り上げることであった。

一九八八年に英文法三クラス四四名で始め、毎年少しずつ充実・拡張し、一九八九年には講読クラスも設置し、四クラス七九人が、一九九〇年には担当者を四人に増やし、五クラス一〇八人が履修した。一九九一年は、英文文クラスも設置して、六クラスで一二七人、後期からはドイツ語の授業も行れた。一九九二年度は英語七クラスとドイツ語三クラスが実施された。一九九三年には八人の教授者により英語十一クラス、ドイツ語三クラスの計三〇〇名以上が履修している。西納先生によりコンピュータデータベースを利用して学習者の関心のある英字新聞記事を読む授業も実施され、一九九四年度からは中国語のC A Iも開始される。

この六年間に学習者が直接使用するプログラムと教材、その学習結果の統計処理、コンピュータ関係の種々の問題をプログラマー、コンピュータ関係の職員や英語母語者の協力を得て改善し、学習時間二百時間を越す膨大な教材を保有する文字のみの外国語C A Iと

しては、かなり充実したシステムを築き上げ、実践や研究報告も既に三〇編以上が専門誌に掲載され、そして二冊の図書も出版され、新聞でも取り上げられたりして、全国でも注目される語学プログラムになった。

機器と施設

機器は日立のホストコンピュータとパソコンとしても使用できる端末機で行い、文字のみを見せることはできるが、写真やビデオの画像と、音声は使用できない。

通信処理ソフトを使用して、教材や解答ファイルを教授者とコンピュータ、学習者とコンピュータで比較的簡単にやりとりできる。教授者のモニター画面を大きなスクリーンに映し出して、クラスに提示することはできるが、各自のモニターに提示することや、ある学習者の作業を教師や学習者のモニターに提示することはできない。教師と学習者や学習者同士で、画面を共有したり、交換したりはできず、ネットワーク化はされていない。

プログラムの内容

プログラムには学習者が英語教材をコンピュータで使用して学習する学習用プログラムとその各学習者の学習結果を集計する成績処理用プログラムがある。

学習用プログラムは、タイプの練習、選択肢、穴埋め、間違い訂正、短文記入で複数正解の可能なものが開発されている。

教材は最初に問題数、ヒントや正解を提示するかどうか、最高所要時間、最低得点、さらに、最高所要時間を超過した場合や最低得点を下回った場合に何度までやり直すが学習者に提示される。(自習用のプログラムでは、学習者が自己の能力に合わせて自由にこの設定ができる)次にその教材の学習上の注意や例題が提示される。

この後は問題が提示され、学習者は独自のスピードで問題をする。間違えばヒントにより、もう一度解答する。二度間違えば次の問題に進む。最後の問題が済めば、一度目と二度目の素点と正答率、所要時間が何分何秒と提示され、求められた成績以上であれば、解答をホストコンピュータに送信して終わる。時間を超過したり、最低得点に達していない場合は、もう一度最初からやりなおす。

書き込み式のプログラムは、教材により、穴埋め、並べ替え、文完成、誤答訂正、完全文の英作などに利用できる。理論的には数十ものを正解とすることが可能である。多肢選択の問題では、一〇九の一つを正答とする問題で、後に誤答分析を行える利点がある。英語のCAIと言っているが、このプログラムは教材さえ作成すれば、語学以外の如何なる科目の練習やテストにも利用できる。ドイツ語もこのプログラムを基に、ドイツ語の特殊文字などを処理できるプログラムを鈴木先生が改良して使用されている。

教授者は学習者の転送した解答ファイルと連結し、採点プログラムにかけると、どの教材をいつ、何分かつてして、成績がどうであったか、各自の記録とクラスの平均値などが一目で分かる。高成績順と短時間順のリストもあり、絶えず個人やクラス全体の学習状況を把握できる。誤答分析のプログラムで分析すれば、多肢選択の問題では各解答を選んだ学習者の数とパーセントを表示し、書き込み問題では、正解者と誤答者の数とパーセントも分かり、難易度は即分かる。

さらに同種の練習問題をいくつかのファイ

ルでした場合、その解答ファイルの合計の統計分析をすることも可能で、個々の結果と集計の結果を各学習者別に一覧にして表示し、学習者の番号順、合計点の高得点順と所要時間の短い順に一覧表を作成する。

更に書き込み練習問題の解答ファイルで、誤答の一覧表を学習者別、または、問題別に作成することが可能で、どのような誤答をしたかが一目で分かる。

この結果は学習作業に生かされ、それ以後のクラス運営や個人指導に利用されている。

教材の内容

上記のプログラムにより、英語学習をする教材も一九八八年秋から今までに作成されたものは、平均的なレベルの学習者が使用して二〇〇時間以上と推測している。それらはタイプ練習、タイプと文法の両方を同時に練習する教材、文法、読解、英作文、語彙、英語検定試験、TOEICやTOEFLの準備教材、海外渡航のオリエンテーション教材など多くの種類に渡って豊富にあり、これらをクラスの目的に合わせて組み合わせて授業をし

ている。残念ながら、機器の関係で音声を伴うものはないが、テープを聞く教材と、その理解度を試すCAI教材はあり、現在会話の教材も試験的に作成している。

CAI授業の運営

学習者は、コンピュータやプログラミングの知識はもちろん、タイプの経験が全く無くとも参加できるCAIのクラスを目指してきた。学習者には、最初の二回のクラスで、英語で書かれた一三頁の詳細なハンドアウトを利用してオリエンテーションを行い、クラスの内容、学習方法、評価方法、機械の使用上の規則や操作方法、タイプの仕方などが十分に理解し、実施できるようにする。

タイプの練習には一〜二回分のクラスを当て、多肢選択問題の練習から徐々にタイプの必要な書き込み問題へと移行していく。クラスは伝統的な講義と練習をして、その練習結果をクラスで反映するのみのものから、個人主体で作業をして、その結果を基に教授者が個人指導をしたり、能力のあるものには、さらに課題を与えたり、難易度の高いものをする

ような個別指導型のものもある。共同作業をさせたり、コンテスタを取り入れたりして、種々の創意工夫をこらしたCAIのクラスが展開されている。

学習者からCAIのクラスは人気がよく、授業中は目を輝かせて、一生懸命に作業をしている。出席率も高く、脱落者も少ない。学習者のアンケート結果やコメントによると、CAIのクラスは満足度が高く、比較的楽しんで受講している。この背景は、学習をしていく実感があり、しかもその効果を自分で確かめられることだろう。不満はコンピュータを使用できる時間が少なく、しかもいつも混んでいて宿題をするのに困ることである。

教員の研修と協力

CAIのクラスでは、施設や機器の扱い方、教材の使用や作成方法など、他のクラスでは不要なことを多く知らなければならぬ。しかも語学の教員はコンピュータに詳しい者はほとんどいない。それで担当者向けのマニュアルも作成し、CAIクラスの運営に必要なことを収録している。更に、新たな担当者に

は、オリエンテーションを行い、機械操作やクラス運営を伝授してきた。これも年々大規模になり、昨年は全国規模の二六〇人参加するCAI研究大会を開催するまでになった。

同じ施設とプログラムを共有して、改善してきたので、教授者の協力は不可避であった。月一度程度の集まりを持ち、色々協議して改善してきた。また、情報処理共同研究費や学術奨励共同研究費により、多くの教員がCAI関係のビジネスショーや他の大学の見学をしたり、講師を招いて学習会などを催して、教員の研修と研究を続けつつ、CAI担当者の養成もしてきた。

意見交換をしながら、どのようなプログラムや教材がよいかなどを検討すると同時にCAIを多くの学生諸君に知ってもらうことも兼ねて、CAIコンテストも一昨年から実施してきた。

CAIの研究は外部のCAIの研究者にも参加してもらい、理論的な基礎研究や実践的な研究をしながら、CAIの実践を改善してきたことは私どもの自慢である。その成果は、理論的なものを中心とした英語教育に関するものとして、『はじめてのCAI』よりよい英

語教育を求めて』（北尾謙治他著・山口書店・一九九二年・A5版二五六頁・二、〇〇〇円）として出版した。また、昨年二月に同志社大学田辺校地で開催した「第四回外国語CAI研究大会」の発表を中心に編集した『コンピュータ利用の外国語教育―CAIの実践と動向』（北尾謙治監修・英潮社・一九九三年・A5版三〇八頁・三、二〇〇円）も出版した。

両図書には付属のフロッピーがあり、それには同志社大学で使用しているプログラムや教材、情報処理共同研究の成果報告、CAI関係の資料なども登載している。これらの図書や多くの出版物を通じて、同志社大学の外国語CAIの研究や実践成果を多くの語学教育者に利用していただいていることを嬉しく思っている。

今後のCAI

私どもが英語のCAIを始めてからの六年間のコンピュータの進歩は急激で、現在では動画をも利用したマルチメディアが主流になりつつあり、大学によっては何千万円を投じて語学教育のCAI教材を作成したり、何億

円を投じてシステムを構築したり、学生全員にパソコンを持たせたりしている。コンピュータネットワークを構築して、学生がそれを利用して教授からの教材や種々の指示を受け取ったり、レポートの提出をしている所もある。国際パソコンネットワークなどを利用して、海外と交信することを教育に取り入れている、高校、中学、何と小学校も多くある。

全国の全ての小、中、高校にパソコンが設置される。それに慣れた学生が入学して来る日もそう遠くない。私たちコンピュータに慣れた外国語教員が乏しい予算で綱渡り式に運営しているCAIは、それまで持つのかと首を傾げている。

金沢工業大学のように、大学を挙げて、コンピュータを利用する教育体制を検討し、大規模の予算と人を確保し、マルチメディアを含めたシステムを構築して、コンピュータをすべての教員が簡単に利用し、教育成果を挙げられるようにすることは急務だ。それまで何とか、この外国語CAIを生き伸ばせたいと願ひ、頑張るつもりだ。

（大学言語文化教育研究センター教授）

同志社文書館構想と人文科学研究所

田 中 真 人

同志社大学人文科学研究所におかれてすでに四〇年近くの活動を続けている「キリスト教社会問題研究会」は、日本におけるキリスト教と社会問題の総合的究明を目指してきた。この研究会が手掛け、その成果を世に問うてきたもののなかには、取り扱っているテーマの性格から当然のことながら、同志社の歴史にかかわる主題のものが少なくない。『熊本バンド研究』『民友社の研究』は初期の同志社の主要な担い手たちについての分析といえるし、『戦時下抵抗の研究』には「同志社の抵抗」などの章がふくまれている。留岡幸助・山室軍平・石井十次という、この二〇年にわたり次々ととりあげてきた一連のキリスト教

社会事業家研究はすべて同志社と新島襄と密接に関わり、同志社をそれぞれの生涯の活動の原点としてきた人物たちである。また『七一雑報』『六合雑誌』『新人』といった一連のキリスト教ジャーナリズム研究も、多くの同志社関係者がかかわっているがゆえに、同志社史研究とさまざまな局面で交差する。『移民社会とキリスト教の研究』でも同様である。

現在進行中の「日本におけるアメリカン・ボード宣教師文書の研究」はラーネッド、デヴィスをはじめとする派遣宣教師の報告書簡を分析するなど、より直接的に同志社の歴史と関わるものといえよう。こうして継続してきた研究活動の結果として、人文科学研究所に

は、同志社の歴史に関する少くない資料が集積されている。

他方で一九七九年に完成した『同志社百年史』と、近く完結する『新島襄全集』の編集を手掛けてきた同志社社史資料室にも当然のことながら、多くの同志社の史的文書が集積されてきた。また大学の学術情報センターにも少なくない第一次史料が納められている。さらに法人内各校では、日々生みだされる多くの文書のうち、永久保存処置を取るべきものは、それぞれの部局において集積されている。工学部移転後の今出川校地の利用が検討されている今日は、『新島襄全集』が完結し社史資料室の事業が一つの節目を迎えている時

でもあり、こうした同志社に関係する歴史的史料や文書をどのような形式で保存集積することがもつとも効果的かについて、一定の検討をすべき時ではなからうか。

明治期の同志社関係者による書簡類など第一次史料のコレクションが古書市場に流れたことが一度ならずあった。その値も少なくない額である。こうした場合、同志社のどの部局が責任を持って収集するかは、明確になっていないし、その予算処置も保証されていない

い。本部管轄の社史資料室は財政基盤が脆弱であったし、学術情報センターは、この種の第一次史料を収集するべき義務が課されているとは言い難いところもある。人文科学研究所は研究スタッフが配置され、前述のように、同志社の歴史にもかかわるテーマについての学術研究体制を持ち、かつ収集した史料の配架保存、そして閲覧の機能を有してはいえる。しかし研究所の史料購入予算は基本的には設置されている共同研究班に配分されており、「キリスト教社会問題研究会」は人文・社会科学の多くの分野をカバーする諸研究会の一つに過ぎない。また前述のように人文研が同志社関係史料を集積するべきとの位置付けが全学・全法人の合意のもとになされているわけではなく、当然のことながら、そのための特別の予算処置が講ぜられているわけではない。だが現実にはこの種の、同志社において受入が至当と考えられる史料は、人文研に持ち込まれることも多く、また「キリスト教社会問題研究会」の運営を担当する人文研専任研究員や研究会参加者によって、この種の史料情報が探知されることも多い。その度に総長や学長に直訴して、特別の買付の処置を

取っていたかどうかよく請願するといったことも一度ならず起こっている。慶応義塾の福沢研究センターの仄聞する実情に比較すれば、お寒いかぎりといわねばならぬ。

同志社関係資料は、今までに述べてきた歴史的史料のほかに、日々生起する、しかし永年保存処置を構すべき資料もある。こうしたものを思い付くままに列挙すれば ①法人、諸学校の基本的な累年記録・法人「事業報告」、教職員名簿、「しばくさ」(女子大学年報)「同志社女子中高年報」など諸学校単位、あるいは学生部、キリスト教文化センター・厚生館保健センターなどの部局単位で出している年報、人文科学研究所の「所報」など。また理事会、大学評議会記録などの基本文書も、一定年限が経過すれば自動的に一般公開の対象とする処置が講ぜられるべきであろう。②広報出版物―法人庶務課の「社報」、大学広報課の『大学広報』『大学通信』『Wild Rover』、大学国際課「Doshisha University Catalogue」、『女子大学通信』『香里だより』『国際高校だより』など。③学術雑誌以外の各校、各局の定期刊行物―『同志社時報』『レゴ』『月刊チャペルアワー』『学術情報センター報』

など。④各校、各学部の「履修要項」「入試案内」「学生便覧(『Student Guide』)」「学生手帳」など。⑤校地学術調査委員会の報告書。

⑥法人、諸学校の刊行する単行本―新島講座講演記録、チャペルアワー講演集、「私学同志社」など。⑦同志社に關係する諸団体の刊行物―校友会(『同志社タイムス』、校友会名簿)、同志社生協(『東と西』など)、私大連盟(『大学時報』、私大財政白書)、同志社共済、私共済(『広報』、私共済ブック)、教職員組合(定期大会議案、組合員手帳、賃金諸条件一覽)「私学経営」など。このほか同志社で発行する学術雑誌・紀要は、従来から各局図書館に受け入れられてあるが、同志社関係資料としても一定箇所に集積されることが望ましい。また大学広報課において、主に報道関係者向けに、同志社関係者の著書などの刊行物が配架展示されているが、こうした単行書もあわせて一か所に集積されたら、文字どおり同志社に「かんする情報センター」として有用なものになる。

こうしたものが集積される機関は「同志社情報センター」あるいは「同志社文書館」と呼ばれるにふさわしい内実のものといえる。

スタッフも事務職員のほかに、固定的な専門的アーキビストが配置されることが望ましい。また業務の性格上、本部所轄であることが自然であろう。ここに集積されるものは、法人内各校・各学部・部局から納入されたり、著者である同志社関係者から寄贈を受けることが一般的なものとなろうから、その資料購入予算は限定的なものであっても対応できようか。社史資料室がこうした機能を附加し、強化していただいて、閲覧機能を持った同志社文書館としての役割を帯びてもらえれば、大変ありがたいと思うのだが。

こうした同志社文書館的な施設に加えて、研究機能を合わせ持ち、同志社歴史資料館の機能をも有したものが必要であろう。同志社文書館が狭義の直接的な「同志社文書」が集積されるのに対して、充実した研究環境を維持するためには、より広い視野に立った資料収集が必要とされよう。こうした役割を担い得る部局は大学人文研のほかにもありえようが、人文研に近代日本のキリスト教と同志社に関する資料群を集集集積するについて、一定の責任と任務が付与されれば、人文研はそれに応じ得る用意はあろうと思われる。

人文研は同志社大学における共同研究の場として総合的な研究分野をカバーすることが求められている。同時に限りある人員と予算のなかで効果的に成果を発揮し、広く社会的に認知された優れた業績を積み上げるためには、同志社の研究所にふさわしい特色を持ったものでなければならない。多くの私立大学に置かれた研究所の一般的な形態と違って同志社大学人文科学研究所が専任研究員を配置していることの意味もこの辺りにあろう。すなわち研究所は特色ある研究分野を有し、専任研究員はその分野を重点的かつ継続的に関わり得る当該研究分野の推進力としての役割を期待されているものといえようか。このように問題を立てたとき、私自身がどこまでこうした責務を果たしているかは、はなはだ心もとないかぎりではあるが、こうした責務のあることを専任研究員は肝に銘じていなければならぬと思っている。

「キリスト教社会問題研究会」は同志社の外部からの研究会参加者が多い。また同志社外からはるばる人文研の資料を閲覧に來られる場合も、この研究会の収集にかかわる資料が多い。おおよそ同志社の内と外に限らず、研

究者にとつてわざわざ研究所の共同研究という、とくに義務でもないし、特別の手当が出るわけでもない職務に自発的に参加する条件は、その共同研究がみずからの研究にメリットがあり、かつ楽しいものであることだろう。外部から手弁当で私たちの共同研究に馳せ参じて、貢献していただける研究者が少なからずいるという大いに感謝すべき現象は、同時に私たちの研究所が築きあげてきた伝統が、多くの研究者を引き寄せるに足る魅力と還元物を有しているということをも意味している。同志社の外から多くの研究者を吸引し得るということは、研究会の活力を示す指標の一つではないか。

こうした特色ある研究活動を行なってきた人文研が、一定の予算的裏付け、場合によってはスタッフの強化のうえに、同志社と近代日本のキリスト教にかかわる歴史的史料の収集についての責任を課せられるならば、それに抱負をもつて応えるにやぶさかではない。なお本文は田中のとりあえずの私見である。

(大学人文科学研究所教授)